
いつか

SORA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつか

【Nコード】
N6912J

【作者名】
SORA

【あらすじ】
この話は、主に14歳の男子、4人が登場する話です。戦闘とか出ません。まったく普通の世界（私たちが生活する世界）での物語です。

9歳のころに、兄を失くした主人公、由也。家族に、これ以上悲しい思いさせたくない、どうやって笑うんだろ、大好きだったのに、失ってしまったショックが大きくて、感情が抜け落ちてしまった。

ある日、同級生の雪村幸太に会う。

兄ちゃんと重なるその幸太と、少しずつ仲良くなっていき、達也
圭悟という個性的（？）な友人を持ち、少しずつ変わっていく由也。
ところが、ある日幸太が学校を休み、そこからただ楽しいだけの
時間に辛さや悲しみが、混じっていく……

と、というのが全体の話のあらすじ的なものです。

すこしでも興味を持ってくださった方は、読んでみてください。

01 雪の中（前書き）

詳しくは出てきませんが、病気の人物が登場します。

また、キャラクターが死にます。

不愉快になりそうな方は、読まないほうがいいと思われます。

初作品のため乱文ですが、ご了承ください！

01 雪の中

雪がちらついている。しんと冷えた空気がマフラーの隙間から入り込んでくる。マフラーに埋め込んでいた顔の下半分を少しだけ上げて、上を見た。

「ん？どした？」

僕の視線に気づいたのか、兄ちゃんが空にあてていた視線を僕の方へと移す。

「兄ちゃんはさ、」

降ってくる雪を見ながら、ただなんとなく話す。

「兄ちゃんは、死ぬことが幸せだって思う？」

「なんで？」

「前見たテレビで“死にたい、楽になりたい”って泣いてた人がいたから。」

「楽っていうのも幸せに入るよね？だから、幸せなのかな、って思ってる。」

「兄ちゃんが白いため息をついた。くしゃみをした僕を優しく撫でてくれながらぽつりぽつりと兄ちゃんが話し出す。」

「ん」と、死んだら、友達のこととか勉強のこととか仕事のこととかで困ることないし、それに怪我とか病気とかで痛かったり苦しかったり、しないと思うな。楽といえば、楽かもね。」

「じゃあ、死んだほうがいいの？」

「兄ちゃん個人的には、生きてたほうが幸せだとおもっうな。」

「なんで？痛いこととかたくさんあるのに？」

「だって、死んじゃったら何もないんだよ。楽しいこととか嬉しいことも。」

「……うん」

「辛いこととかたくさんあるけど、それでも頑張って生きてたら楽しいこと絶対あると思うんだ。」

僕は兄ちゃんの話しを聞きながら、足元にあった雪の固まりを長靴の先で蹴っ飛ばす。はらりと雪が崩れた。

「だから生きてたほうが幸せ。絶対」

そう言い切った兄ちゃんの顔は、いつもよりキリツとしていて少しだけ悲しそうで不意に

“どこか遠くに行っちゃうんじゃないか”と不安になった。

「もういいよ」

白いジャンパーの裾をつかむ。どこか遠くを見ているような兄ちゃんの顔がいつもの優しい表情に戻った。

「ごめんね。」

暖かい手で僕の頬を撫でながら困ったように笑う兄ちゃん。

返事の代わりににぎっていたジャンパーを更に強くにぎった。遠くに行かないように強く、強く。

「歩けないよ。ほら、手繋ごう。ね？」

頬に当てていた手を僕の目の前に差し出してくれる兄ちゃん。

コクンと頷いて袖の中に引っ込めていた手をそつと外に出すと、兄ちゃんが包み込むようににぎってくれた。暖かくて気持ちいい手だった。

「甘えん坊だね。」

とからかうように兄ちゃんが笑った。

その笑い声も、降り積もる雪に吸い込まれる。

ずっと、傍で笑ってくれると思ってた。

NEXT

01 雪の中（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます！

私は、本格的に小説家を目指しています。

なので、意見やアドバイスのコメントをもらえるととっても嬉しいです。

2話も頑張つて、投稿するので末長く、よろしく願います）
^^）

02 ばいばい（前書き）

主人公由也が、兄ちゃん 兄ちゃんうるさいかもです。
若干ブラコンチックですが、見逃してください。

02 ばいばい

何日か経って、兄ちゃんは今もう笑ってくれなくなった。少し前まで、笑っていたのが信じられないほど呆気ない終わりだった。

「兄ちゃん、兄ちゃん！また元気になるよね？！ねえっ」

ベッドに力なく横たわる兄ちゃんにすがりつく僕。兄ちゃんが頬に手をそえてくれた。

その手は、冷たくて震えていた。

「ゆう…や、傍にいてあげられなくて、ごめんね……？」

「やだよ！謝らないでよっ！」

謝られたりしたら、兄ちゃんが本当に死んでしまいそうで、怖くて頭をメチャクチャに振った。

兄ちゃんが、なだめるように笑う。

「由也、辛くても生きて……、幸せになって……。」

「がっ、頑張る……！」

頬にあった手を強くにぎった。

「いい子、由也。大好き…だよ……。」

「僕もっ」

僕の手を弱い力でにぎりかえしながら、兄ちゃんは弱々しく笑った。兄ちゃん表情が、フツと変化する。

「できたら、もっと、生きたかった…なあ……」

ぽつりと呟いて、兄ちゃんは目を閉じた。

頬にあった手が、するりとすべりおちる。

一雫の涙が、僕の目からこぼれおちて、頬を伝う。眠るような兄ちゃん顔に、涙が落ちた。

「ばいばい　ありがとう」

その声は、しんとした部屋に小さく響いた。

N
E
X
T

02 ばいばい（後書き）

今回の話は、凄く短いですね……！！

やばいです。

つまらないとは思いますが、読んでくれた方には本当に感謝いたしますっ！！

また、アドバイスなどをもらえたら嬉しいので、書いてくれたら光栄です。

後書きまで日本語がメチャクチャでスイマセン。

まだまだ、最終話は遠いですが、よんでやってください（＾・＾）

03 出会い（前書き）

今回は、新キャラ登場します。

サブ主人公になる、幸太っていうやつです。

わけありという設定なので、最初はただの変人ですが、長い目で見てやってください。

03 出会い

それから季節は何度も巡り、僕は14歳になった。
夏。

「行ってきます。」

雨が降りそうな空、晴れている空。どんな空にも兄ちゃんがいるんじゃないか、なんて思って朝、空を見上げて、あいさつするのが僕の癖になっていた。

兄ちゃんが、もう僕のそばにいない。そう思うと、寂しくて、辛くて、少し怖くて笑うことが極端に少なくなった僕。だけど、朝だけは兄ちゃんがそばにいてくれるような気がして自然に笑っている。

春から夏へ。季節は変わり、時間は進む。

“進んでないのは、僕だけだ。”

空には大きく輝く太陽。眩しくて、目を細め、見上げる。

一瞬、ちらりと太陽が、悲しげにかけた。

2時間目は、理科だ。理科室に移動している最中、ぼーっとしていたのか筆箱を落としてしまった。運悪く、筆箱のチャックが開いていたらしく廊下に散らばる、無数のペンたち。

僕の後ろから来ていた、女子2、3人が迷惑そうに眉をひそめて、そこをまたいでいった。

ペンやら消しゴムやら色々散らばった廊下にちらりと視線をはせる。
「最悪だ」

ため息とぼやきが一緒にこぼれた。教科書を片手に持ち直し、かがむ。

そしたら、手の先にあったはずのペンが、何本か消えた。

「え？」

驚いて思わず顔を上げると、ペンを差し出す、犬みたいな人がいた。
「はい、ずいぶんたくさん落としたね？」

そう言つて、笑つた犬みたいな人。

―ほら、手繋ごう？―

兄ちゃんの笑つた顔に重なつて、息が詰まる。

「なに？なにかついてる？」

可笑しそうにクスクスと笑う目の前の人の笑い声で、はっと正気に戻つた。

「いや、別に。あ、ありがとう、ペン。」

変に思われたら嫌だから、慌てて礼を言う。

「作り笑いなんか……」

「へ？」

いきなり怒つたような顔になる、犬みたいな人。

キツときつめの目つきで睨まれて、僕は顎を引いた。

「作り笑いなんか、すんなよ。下手糞なくせに！」

いきなり、なんだっていうんだ。

いきなりの笑顔への駄目だしで、怒りすらもおぼえる暇がなかった。

少しだけ、首をかしげたままの僕に「遅れるよ。」と、一言残し僕に背中を向けた。

窓ガラスを通した夏の太陽の光に溶け込む背中をただ見つめる。

―辛くても生きて、幸せになつて―

果たせそうにない、兄ちゃんとの約束が、何故か頭に響いた。

NEXT

03 出会い（後書き）

幸太はこれだけみると、なんだか一昔前の青春漫画にも出てきそうな、熱そうなうざったそうなキャラですが、これからしつかりいいやつになっていくはずですよ！

幸太も、私の小説も見捨てないで読んでくださった方。本当にありがとうございます。

次回も、頑張ります！！

04 幸太（前書き）

またまた、幸太が変人です。頭は、正常に働いています！
不思議キヤラの空気をまとわせるのは、もうすぐやめます。
とりあえず、どうぞ。

04 幸太

放課後、委員会の企画に必要なプリントを作るために、誰もいない教室に一人で残っていた。

カサカサと乾いた紙の音だけが聞こえる。

“挨拶の活性化のために” 題名だけが紙面にでかかとのり、その下には僕の走り書きの文字が、ばらばら並ぶ。シャープペンを片手に持ち、頬づえをついたまま窓の外へと視線をさせて黙っていた。委員会の企画なんか頭になくて、今日の犬みたいな奴と兄ちゃんの顔がかわるがわる浮かんで消える。

チャイムと、少し悲しげな音楽が教室に響いた。

どれくらい僕は、ぼうつとしていたんだろうか。時計を見ると、完全下校の時間の5時半になろうとしていた。

明るかったはずの空も、紅く染まりつつあり、手元が暗く、プリントに書き込まれた小さな文字が見つらいほどに、暗かった。

とりあえず、プリントを机に突っ込んで、足元にあった鞆を抱えて廊下に出た。

廊下は不気味なほど静かだった。

部活の掛け声すらもう聞こえない。身にしみるほどの静寂が僕を“お前は一人だ”と、嘲笑っているように感じて、僕は足早に外に出た。

ポケットに手をつ込み、ひたすらまっすぐ歩く。人通りが少ない、小さな川が見えてきた。

幼い頃、兄ちゃんと近所の子達とよく此处で遊んだ。瞼の裏に楽しかった情景が鮮やかによぎる。

うつむくと、鼻の奥につんとした痛みを感じた。

「あれ？」

声と一緒に、黒い人影が近づいてくる。誰だろう、暗くてよく見え

ない。

「佐藤……由也……？だっけ？」

声を聞いてピンときた。前、いきなり僕の笑顔に駄目だししてきた変な犬。

「なんで此処いんの」

僕は俯いたまま訪ねた。

「もう夏だね」

犬は、質問に答えず質問とまったく関係のないことを独り言のように呟いた。

喧嘩うつてるのか、コイツ。

僕が黙っていると、犬が言葉をつづけた。

「夏の空って、あんまり広い感じしないけど好きだなあ、俺。」

につこりと笑う犬。胸の奥がぎゅううつと切なくなるような笑顔。

—だから死ぬのは悲しいことだと思うよ。-

なんで先からこいつと兄ちゃんが重なるの？

べつにこんな奴、好きでもなんでもないしどこか遠くに行っちゃっても、寂しくもなんともないのに

“遠くに行っちゃうんじゃないか。”と、強い不安が胸に渦巻く。

「こっやって、季節ごとの空見れてさ。」

犬が、思い切り空を仰ぐ。

「俺、生きてんだよなあ。今」

凄くうれしそうな顔でそう言った。

心臓が大きく音を立てた。僕の顔が引きつるのが分かった。

「いきなり変なこと言って、ごめんね。」

犬が苦笑していた。

「じゃあ、明日。」

「……っつ、うん……。ばいばい」

変な奴。

でも、生きていることがどういうことか知っているんだろうな、と思った。

04 幸太（後書き）

特に無いです。

次回も、よろしくです。

（テスト期間中なので、しばらく書けないかもです。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6912j/>

いつか

2011年10月6日17時23分発行